

平城京左京三条一坊一坪の調査(平城第491次)

平城宮の正門として偉容を誇る朱雀門、その南東すぐに位置するこの地は、平城京の地割りでは左京三条一坊一坪にあたります。西側は平城京内随一の大路・朱雀大路に、北側はそれに次ぐ二条大路に面しています。

この左京三条一坊一坪は、奈良市教育委員会などによるこれまでの調査で、坪を囲う築地堀などが設けられていなかったことがあきらかとなっています。朱雀門前という立地とあわせて考えれば、この坪は門前の広場のようなスペースとして利用されていた可能性が高いと言えます。

この地に国土交通省による平城宮跡展示館(仮称)の建設が計画され、事前調査として奈良文化財研究所が2010年度から継続的に発掘調査をおこなっています。これまでの調査で、奈良時代前半に造られた大型の井戸や平城宮造営期にまで遡る可能性のある鉄鍛冶工房群が見つかるなど、徐々に坪内の様子があきらかになってきています。また、2011年度冬の調査では坪内道路(=左京三条一坊一坪を南北にほぼ二分する、幅約9mの東西道路)を約44mにわたって検出し、加えてそれよりも前に建てられた南北棟の長大な建物群も見つかりました。

今回の調査は、この南北棟建物群が南にどこまで展開するか、また、それより南ではどのような土地利用がなされていたかなどをあきらかにすることを主な目的として、2012年4月2日より開始しました。調査面積は1,872㎡です。

調査の結果、3棟の南北棟建物は南へ更に2間分ずつ広がることがわかり、それぞれの規模が確定しました。一番西の建物は桁行が10間にもおよび、2ヵ所の間仕切を持つなど構造も特徴的です。真ん中の

建物はすべての柱筋に柱をもつ総柱建物で、床面積は130㎡近くあります。総柱建物というと倉庫の可能性が考えられますが、もしこれが倉庫なら、この大きさは異例です。

興味深いのは、3棟の建物が南の柱筋を揃えて建てられていたことです。ここから建物群が同時期に、同一の計画のもとに建てられたことがうかがえます。また、建物群の南端は左京三条一坊の一・二坪を画する三条条間北小路の北側溝から100尺(約30m)の距離に位置しており、条坊設定とも密接に関わりながら建設された可能性も考えられます。

建物群の南は、調査区東南隅で新たに見つかった建物1棟以外は目立った遺構がなく、広場のような様相を呈していたことが判明しました。以前の調査でも同様の指摘がなされていましたが、その主な根拠は築地堀がないということでした。今回、広い範囲を面的に調査した結果、既存の知見を裏付けることができました。《何もない》ことも、ときに重要な成果となりうるのです。

今回の調査成果は、6月23日に現地説明会を開催し、広く多くの方々にお伝えしました。梅雨の最中で天気が心配されましたが、当日は幸運にも晴天に恵まれ、650人以上の方々にお越しいただき、ナマの現場をご覧いただくことができました。調査成果の「早く・広く・正確な」発信も、私たちの大切な責務と考えています。この奈文研ニュースも、そのような取り組みの一環です。

今回の調査は7月6日をもって終了しましたが、2012年度夏の調査として、更に南側を継続的に発掘しています。左京三条一坊一坪の調査は着実に進んでいます。いずれその全容があきらかになることでしょう。(都城発掘調査部 山本 祥隆)



調査区全景(西から。建物群の南柱列が揃えられている)



現地説明会の様子(北東から)